



Title	心的表現と時制-ウィトゲンシュタイン的解明-
Author(s)	奥, 雅博
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2000, 26, p. 195-210
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8883
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

心的表現と時制
—— ウィトゲンシュタイン的解明 ——

奥 雅 博

目 次

1. 前書きに代えて
2. 「時制」という限定の問題
3. 問題例の提示
4. 私の相手方の見解の提示
5. 私の相手方はものをパラダイムとして心を理解している
6. 「心的表現」の規定
7. この規定の問題
8. 問題の限定
9. 知識も信念も心の内的な状態・出来事ではない
10. 意志・意図について
11. 「つもり」と「意味」
12. 終わりに

心的表現と時制 —— ウイトゲンシュタイン的解明 ——

奥 雅博

1. 前書きに代えて

この原稿の以前のバージョンは1998年11月7日に東京大学文学部で開催された哲学会第37回研究発表大会で発表された。その折りの討論、その後の多くの諸氏からのコメントに感謝する。とりわけ「シテイル」というアスペクト表現の言語学での扱いについての飯田隆氏の指摘は、私をこれまで不案内であった領域へ導入してくれた。印象的な一例を挙げるなら、氏に教示された工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』(ひつじ書房)がある。著者の母語である宇和島方言では、標準日本語では「シテイル」一語ですませている動作継続と結果継続を、「シヨル」「シトル」に分けて表現する。興味深い例を引用すると

「停留所に行ったら、ちょうどバスが着きよった。」と

「停留所に行ったら、バスが着いとった。」、

「昨日、庭でへびが死によった。水かけてやったら、元気になった。」と

「昨日、庭にへびが死んどった。お墓を作ってやったんよ。」

という使い分けがある。特に、後者の例では「シヨル」の過去形、「死によった」は「死ぬところだったが、死ななかつた」の非現実を意味している。「この子、この間、死によったんぜ。車にぶつかりそうになって。」とも言うのである。

この説明は理解でき、この用法も習得可能であるが、他方、標準日本語への簡単な言い換えがあるわけではない。ここで「死んでいく」という状態が「死んでしまう」という状態に先立つと考え、「死によった、そして死んどった」、と言いかえるのは不可能である。あるいは、このような言い換えに誘われるのは、哲学している間に限ってのことである。これを示すのが、本論考の主題の一つである。工藤氏の事例は哲学者の予備知識や先入見なしの、しかも日本語を素材とした事例として貴重である。以下、折にふれてリファレンスしたい。

2. 「時制」という限定の問題

「心的表現と時制」、英語にすると *Mental Expressions and Their Tenses* という表題の

許で検討しようとするのは「時制」という表現から明らかなように、まず第一に *mental verb* 動詞である。心的動詞の振る舞いとそれ以外の動詞の振る舞いの違いに「心的」な事柄の特性がどれほど示されるか、これを解明してみたい。

この主題は、ウイトゲンシュタインからその着想の多くを得ている。例えば、『心理学の哲学Ⅱ』63節「心的概念の取り扱いの計画」、148節「心的概念の分類の続き」(『断片』472節、483節、488-492節、621節)を参照されたい。ただし、現在の論考では、心(理学)的概念一般ではなく、その動詞と時制に集中して考えたい。

「時制 *tense*」という表現をさしあたり使用しているが、この「時制」は言語学者のいう「テンス」に限定するものではなく、「テンス」と「アスペクト」の両者を包摂した「時間性 *temporality*」の意味である。「テンス」という形態への注目は文法学者にとっては当然ではあるが、他方「テンス」は時間性を表現する道具立ての一部に過ぎない。第一、日本語には「する」と「した」の二つのテンスしかない。英語では *will* か *shall* を義務的に使用して未来を表現せねばならないが、ドイツ語ではそうではない。フランス語の *passé composé* と *passé simple* を比べて、後者が過去表現の基本形である、と述べるとすれば、これは形態に注目したかぎりの話である。

さらに、時間性の表現形式も、時とともに変化する。ここ数十年間での *I shall* から *I will* への推移、ドイツ語での *Präteritum* から *Perfekt* への移行はその好例である。しかも、英語の完了形が「アスペクト」であるか「テンス」であるかについて、専門家で一致を見ていないという現状を鑑みて、ここでは *temporality* を包括的に考察したいと思う。

英語の *desire*, *will*, *believe/belief* が典型例であるが、たしかに、ヨーロッパ語では、心的動詞と心的名詞の距離はそれほど遠くない。即ち、語根が同じのみならず、名詞と動詞の原形までもほとんど一致している例がある。しかも、AIを考慮した心の哲学は *desire* と *belief* に現在焦点を合わせている。これに *will* を付け加えれば、心の哲学の全領域がこれでカバーされる訳ではないにせよ、多くの主要な問題を究明する橋頭堡が既に与えられている、という観がある。しかし、これらの英単語を自然に表現する日本語が存在しないことも明らかである。

漢語の語幹に形式動詞の「する」を付けて新たな動詞を作るという手法は確かに存在し、約一世紀半前の造語である「哲学」の動詞形「哲学する」は今日では市民権を獲得している。他方、「意志する」をワープロで入力すると、代表的な日本語辞書ではことごとく「縊死する」のみが表示される。(因みに、「自然な学習」に任せたところ私の ATOK 11は八ヶ月後に初めて「意志する」を表示するに至った。)
「意志する」という表現が市民権を得ていないことが、ここに如実に示されている。

それ故、私は初めに次の三点を指摘したい。第一に、ヨーロッパ語で哲学する哲学者達が彼らの母語、さらには祖語としてのギリシャ・ラテン語を参照しつつ行った細かな議論、しかも事例によっては彼らの間ですら論争の余地のある論点¹⁾から学ぶところ

は確かに多いが、他方隔靴搔痒の感があることも否めない。第二に、心的表現に関するヨーロッパ語での議論を、たとえ我々はその論点を理解しても日本語に簡単に移植できないのであれば、このことは、当の「心的」な事柄が言語から独立な普遍的現象であるというよりも、むしろかなりの程度言語依存的であることを示している、と考えられる。第三は第二点からの帰結であるが、「意志する」が市民権を得ていない段階で「意志行為」といった概念の輸入は止めるべきである、あるいはすでに密輸入されているならば、その既成事実化には慎重であるべきである、ということである。「意志行為」なるものが想定された原因は、will が名詞としても動詞としても使われる、という偶然的事情かもしれないのである。

3. 問題例の提示

とりあえず、次の六つの例を考えてみたい。次いで、これらの問題例についてのある考え方を批判する形で私の考えを提示したい。なお、六番目を除けば、ウイトゲンシュタインからの借用例である、といえる。²⁾「つもりだった」は *gemeint haben, have meant* の苦肉の訳である。

- a) 子供にゲームを教えてやってくれ、と頼んだところ、オイチョカブを教えられ、そんなつもりではなかった、という。
- b) +2 を続けることを教えたところ、子供が100, 104, 108... と書き記す。そこで「自分は100, 102, 104 と続けるように教えたつもりだった」という。子供に代数を教えたとき $a_n = n^2 + 2n + 1$ の $n=25$ の場合は676 のつもりだった、と当時計算していなくてもいえる。
- c) 昨日は彼の名前を覚えていたのだが、今は思い出せない。いつ忘れたのか。
- d) “poundal” という語の意味を私は昨日から知っている、理解している。だが、絶え間なく、眠っている間もか。
- e) 子供が初めて昨日「希望」という言葉を使った。彼が初めて希望を抱いたのはいつか。
- f) 「彼は昔はリベラルだったが、今ではがちがちの保守だ。」いつリベラルから保守に変わったのか。

4. 私の相手方の見解の提示

私の相手方はこれらの問題例について、以下のような説明を与えるであろう。

a) について。「つもりだった」は「つもりである」の過去形である。それ故、a) が正当にいえるためには、依頼の時点でオイチョカブの排除が何らかの意味で現在していたのでなければならない。オイチョカブの排除が念頭にあったのなら十分である。さもな

ければ、この「つもり」は心的状態であるから、当該の時点で、意識されようと無意識であろうと、少なくとも態度として実現されていなければならない。

b) について。a) とほぼ同様な議論ができる。n の第25項目が念頭に上がっていたのでなければ、このように、過去のつもりを引き合いにだす謂われはない。

c) について。忘れることは、昨日から今までのどこかの時点で起こったに違いない。忘れることと、忘れてしまっていることに気づくこととは別のことである。忘れた時点の特定は心理学が発達すれば可能となるかもしれない。

d) はc) と裏腹である。眠っている間「無理解」になっているのではないとすれば、理解という状態は継続している、それ故、「絶えず理解し続けている」といって差し支えない。³⁾

e) について。「希望」と発話することと「希望を抱く」こととは別なことがらである。正しく「希望」といえる場合は希望を抱いていなければならないが、他方、希望を抱いているからといって希望を表現しなくて差し支えない。また、経験則に照らし合わせれば、「希望」と命名する以前にいろいろ内心の探索があったと思われる。それ故、発話以前に希望が抱かれたはずである。

f) について。「リベラル」から「保守」への転換の時点が存在するに違いない。彼の内心の変化を連続的にスキャンできれば、転換点の特定も夢ではないであろう。

5. 私の相手方はものをパラダイムとして心を理解している

大きな見通しをここで述べるならば、私の相手方は心についてのあるモデルを暗黙のうちに仮定しており、しかもそのモデルは実はもののモデルである。デカルトのいうように、ものの本性は延長であり、空間的な実現である。時間が成立するために神による連続的創造が必要であるか否かはともかくとして、数学の連続性とのアナロジーで言えば、ごくわずかの突然変異を別にすれば、二つの互いに近い時点同士の状態は、多少の変化はあるにせよ、大体似ている、と考えられる。それ故、ある一時点の心の状態を把握できれば、他の時点での心の出来事や状態はそこから連続的にスキャンしていけばよい、ということになる。ここで、マテリアリズムを認めて心が脳に実現されていると考えるならば、心は一つのものに他ならなくなる。まさに、時間は空間の第四次元なのである。

これに対して、私の立場は、心をさしあたり心的表現を手がかりにして考えよう、しかも、心的表現が今素描した物的モデルに従って用いられるわけではないことを示そう、とするものである。

6. 「心的表現」の規定

同語反復的響きはあるが、私は「心的表現」を「心的な存在者が心的である限りにおいて、帰属させられる表現」と規定したい。例えば「理解」は心的表現とみなされる。私について「理解する、理解しない」ということが可能であり、ここで私に「心」があることが前提されており、しかも、私の体重は冷蔵庫と比較可能な60kgである、というのではない意味で、「理解」が私に帰属される故に、この表現は心的表現なのである。⁴⁾

7. この規定の問題

この規定から直ちに心身分離・心身結合の問題が浮かび上がってくる。いうまでもなく、私は分離主義者ではない。例えば、私たちは身体なしに食べることはできないが、「消化する」とか「流動食をチューブで流し込む」とは区別される「食べる」ことには「心」が関与している。また、「単に足が動く」のではない「歩く」についても同様である。さらに、念力による殺人は我々には不可能であり、それ故身体運動を必要とするが、他方心が関与しない限りその出来事は殺人ではない。これらの事例では、心的な事柄と身体的な事柄はわかちがたく結合しており、これを単純な図式に還元すれば誤謬が生じる、と考えるので、私は分離主義者でも浄化主義者でもない。

更に、人間に限らずかなりの動物について、「思う」「与える」「かみつく」という動詞が使用可能である。例えば、「あの犬は、主人が裏口から出てくると思っている」「ツバメの親が雛に餌を与えている」「ピラニアが牛にかみついている」というのはごく自然な表現である。犬からピラニアまで、メンタリティーの度合に確かに差があると感じられるが、一義的で明瞭な線引きがどこかで可能か否かは定かではない。第三に、本論文の主題である時制との関連でいえば、感覚に関する表現は、心的表現の特性を際立たせる点ではむしろ不適切な事例のグループである、といえる側面がある。感覚については、始まり、終わり、継続、同時が指摘でき、先の物的モデルもあながち不自然とは思われない面があるのである。

8. 問題の限定

しかしながら、感覚に関する言語表現をことごとく「物的モデル」で処理できると、私は考えない。眼や耳を用いて物事を識別する動物がいるが、感覚に関する言語表現には人間特有の問題が存在する。例えば「見る、見える」と「ととして見る」の関係の問題、「聞く、聞こえる」と「この意味で聞く」の問題、さらには、「痛みの言語表現と痛みの振る舞い」の関係の問題がある。これらの問題へのウイトゲンシュタイン的アプローチに関しては、『思索のアルバム』に収めた多くの論文で私の考察を述べてきたが、こ

では更に立ち入って、心身分離主義者なら「純粹」に心的とみなす表現をとりあげて主題的に論じたい。即ち、「知識」「信念」「意志」「意図」「つもり」「意味」といった表現が主題となる。

9. 知識も信念も心の内的な状態・出来事ではない

次の例文から問題を検討したい。

He says "I know p", but it is not the case. Therefore, it is false that he knows p.

(彼は「私は p 这件事情を知っている」というが事実はそうでない。それ故、彼が p 这件事情を知っている、というのは誤りである。)

I said sincerely "I know p", but it was a mistake. I did not know anything about that matter.

(私は誠実に「私は p 这件事情を知っている」と述べた、しかしそれは間違っていた。私はその問題について何も知らなかったのだ。)

He believes p, but it is not p.

(彼は p だと思っている、しかし p ではない。)

I believed p, but it is not p.

(私は p だと思っていた、しかし p ではない。)

*I believe p, but it is not p. (いわゆるムーアのパラドックス)

(私は p だと思っている、しかし p ではない。)

いわゆるムーアのパラドックスについては議論があるにせよ、それ以外の文章には問題なく使用できる場面がある、と私は考える。しかし、'know'についての初めの二例はどうかであろうか。もし「知る」が心をもつ存在者の内的状況を述べるものであるならば、知る対象がどうであろうと、主体の報告は誠実になされた限り受け容れられるべきであろう。ある時点で'I know'が言えるならば、その内容に対してそれ以後は'I knew'ないし'I have known'と言えることになるであろう。しかしながら、事実と合致しないと判断されるやいなや、「知っていた」という過去の発言さえ撤回されるのである。

「信じる」の文法は「知る」に比べれば緩やかであり、彼が間違っことを信じていること、私が間違っことを信じていたことは、「信じる」の用法として認められている。問題はいわゆるムーアのパラドックスが容認できるか否かである。

容認する立場は、この文の前半を私の内心の報告、後半を事実についての報告とみなし、しかも両者を独立とみなすことに依拠することになるであろう。しかし、この文章は容認できない、というのが私の直観である。

第一の理由は、この文が発話される文であり、発話が一つの言語行為である、ということにある。言語行為である限り、私のそれ以後の行為と有機的連関を形作っているは

ずである。ところで、この発言をする人は、それ以後 p と想定して暮らすのであろうか、 p でないと想定して暮らすのであろうか。あるいは、 p であるという不確かな想定（信念）と p でないという確信（断言）を併せ持つのであろうか。両者の併存が不合理であるが故に、問題の文は容認できないのである。ウィトゲンシュタインは、問題の語り方をする人は、まるで二人の人が一つの口で話しているように見える、とコメントしている。

繰り返しになるが、「彼は誤って p と信じている」と言えるし「私は誤って p と信じていた」と言えるものの、「私は今誤って p と信じている」とは言えない。ウィトゲンシュタイン流に言えば、「誤って信じる」という動詞があったとしたら、それには直説法一人称現在形が欠けているのである。⁵⁾

それでは、「知る」「信じる」とは一体何なのか。私の考えを率直に言えば、フラットな文にかかる修飾語である。

やや大げさな言い方をしよう。我々が自分を含む世界に対して態度をとるとき、我々は「情報の蓄積」に支えられている。この情報の一部が言語表現にもたらされるとき、述べられる内容に対して修飾が施されることがある。命題に対していわば認識様相演算子が施される。「知る」や「信じる」はこのような修飾語に他ならない。この修飾語が何らかの「実在」を指示すると考えられると、「内的状態」の記述とみえてくるのである。しかし、この修飾語はすべての自然言語を通して均一とは限らないし、また同一の言語内でも時代を通して均一とは限らない。例えば、小西友七編『英語基本動詞辞典』（研究社出版）の教えるところであるが、英語の 'believe' は、「事物の存在や真実性を信じる」というのが原義であったが、話し手が「信じている」という意味が薄れ、think, suppose と同義的に「思う」「考える」という意味にも用いる、また、「確か... だと思う」という意味にも用いるようになってきたのである。とはいえ、全ての 'suppose' を 'believe' で置き換えてよいわけでもない。たとえば 'Suppose' で始まり、「当初の supposition は誤りであった」で終わる帰謬法の証明で 'believe' を用いるわけにはいかないであろう。（かつて信じたことが誤りであったことが後にわかる、というのはよくある話であるが、定理の証明にあたってその否定を信じるというのは、不合理であろう。）いずれにせよ「私は今 p と知っているのか、それともそう信じているだけなのだろうか」と自問し、内省によって答えを発見しようとするのはナンセンスである。⁶⁾

10. 意志・意図について

我々の行為の全てが成功するとは限らない。ある人を撃ち殺そうと鉄砲を撃ったが狙いは正確であったにもかかわらず、最後の瞬間に風が吹く場合がある。冷蔵庫を一人で担ぎ上げようとするが駄目な場合、重量挙げで最後の瞬間に成功する場合がある。あるいは、起きようとするが身体が麻痺して起きられない場合がある。

このような場合「何を目指していたのか」、を尋ねると答えが返ってくる。意志ない

し意図を述べる表現である。他方、私がスプーンでスープを食べるとき、私は自分の手を動かしている。手は麻痺していないし、何をしているかと尋ねられれば、「スプーンでスープを食べている」と答えられる。いやがる子供の場合のように巨人が力づくで私の腕を動かしているのでもなければ、食人鬼が銃剣で脅して私をフォアグラにしようとしているわけではない。ここで、「自らの意志に基づいてか」という問いを肯定し、「スプーンで食べようと思ってスプーンを動かしたのだね」という問いを肯定すると、意志にまつわる周知の哲学的混沌に落ち込んでしまう。即ち、まず意志が発動する、意志が抱かれる、意志行為が行われる、その結果、当の行為が成就したりしなかったりする、しかも、先立つ意志と意志の実現としての行為との関係は単なる継起ではなく因果関係でなければならぬ、しかも、心的な意志行為がどうして身体運動をもたらすのか、さらには、意志行為自身を意志することは可能か、といった問題まで生じてくるのである。

しかし、このような発想は倒錯している、というのが私の考えである。

まず、(心臓の鼓動や飛んでくるボールに当たるといった人に生じる出来事、あるいは膝蓋腱反射といった動作でない限り) 大抵の行為は、特段の事情がない限り「意志が関わっている」、といたなければいってさしつかえない。このことはいわば分析命題であって、例えば、意志が関わらない限り殺人という概念の成立する余地がない。その上で、必要に応じて「意志」に関わる表現が行為の修飾として用いられるのである。例えば、行為の実現のために「努力」を要する場合、行為が実現しなかった場合、「心ならずも」強制の下でなされた行為、さらには「心あらずに」放心状態でなされた行為などの場合である。これに対して、ごく普通の「腕を上げる」という行為について哲学以外の場面で、「私は腕を上げようと思い、そして腕を上げた」と言われるなら、「腕を上げるのを躊躇う事情でも何かあったのか」と問いかえすのが自然な反応であろう。ライル⁷⁾を引き合いに出すならば、ある行為についてそれが *voluntary* だったか *involuntary* だったかが日常問われるのは、してはならない行為をした場合であって、例えば静粛にすべきところで笑い声をたてたので非難されるべきか、くしゃみをこらえきれなかったのでやむを得ないとされるか、という文脈でのことである。この考えによれば、今日の朝食を *voluntary* に食べたか否か、という問いは場違いな問いになるであろう。

「殺意」に関してもその有無が問題となるのは、例えば法廷で「あなたは、相手にバットで二、三回殴られた後、やっとの思いでそのバットを奪い、相手を殴ったのですね、相手を殴り続けるとき、このままでは相手は死ぬかもしれない、いやこんな奴なんか死んでしまえばよい、と思いませんかでしたか、大事なことです、よく考えて、正直に答えて下さい」と尋ねられる場面であろう。

will, voluntary, involuntary, intentional, deliberate といった表現の相互関係は、各自然言語により微妙な差異がある。これについて英語で書かれた論文や著書を日本語に翻訳したり、学部学生に説明したりするときに、日本語の「意志」「意図」等の表現にうまく載せられないところがあることは、我々はよく承知している。ここに、この種の事象

の「言語依存性」の程度が示唆されている。

「意図する *beabsichtigen*, *intend*」という表現についてのウィトゲンシュタインのコメントにふれるならば、彼は『断片』48節以下で、「意図をことばや記号で表現する」「意図に従って行為する」ということを一語で示す動詞を持った未知の言語があってもおかしくない、そこでの用法は、*beabsichtigen* と異なっているであろう、と述べている。確かにその通りで、意図はむしろ行為や思考に対する「副詞的」修飾とみなすべきであろう。適切な日本語コーパスを準備した上で経験的にチェックすべき問題であり、ここでは見当を述べるに留めるが、日本語では「意図した」「意図する」で文が終止することはまれであり、たとえ終止形が用いられても、「そして」「しかし」といった順接・逆説の接続詞を要求するのが普通である、と思われる。さらに、「意図する」という動詞の使用自体がまれであり、哲学者の文章を除くなら、「甲は乙の殺害を意図し、犯行に及んだものである」といった判決文で（過失でも防衛でもないという意味で）行為の責任の確認に用いられるのがほぼ唯一の例ではないか。ここでの表現の順序関係を出来事同士の時間的前後関係と考えることが、哲学的疑似問題の温床となっている、と私には思われる。

11. 「つもり」と「意味」

「田中が僕に手紙をよこした」と私が述べ、「どの田中のことか」と尋ねられて、「田中角栄だ」と答えたとする。この場合、私は当初の発話の折の体験に基づいて答えるわけではない。はじめの発話の折に複数の人物に該当する「田中」という語から特定の個人への意味づけを行い、その意味づけを今思い出しているわけではない。同様に、「あいつは阿呆だ」と言い、あいつがAの場合とBの場合とでは、発話の折に何か違いがあったかと問われれば、あっても差し支えないが、違いがある必要はないのである。

gemeint haben という過去形については既に述べたが、現在形で「そのことの意味は何ですか」と聞かれて答える場合、あるいは、“*ich meine*”, “*I mean*”とってパラフレーズをする場合、我々は真に表現すべきものに向けて「意味作用」を行ったり、それを記述したりしているわけではない。むしろ「意味」という言葉は、必要な言い換え、注釈のための言語上のデバイスなのである。ところで、念のためフィクションについてふれておくことにしたい。

テレビで心理学の教科書が広げられ、視聴者の代表が設問に答えている。アドリブの実験を取り入れた教育番組だと思って見ていると、サスペンスドラマの一場面だったことがわかり、ずっこける。被験者も芝居をしているとは思われず、教授も俳優がせりふを諳んじているとは見えなかったのである。

フィクションと現実の違いはどこにあるか。同じ発話が行われていても、フィクションの場合は意味作用が現実には届いていない、逆に、フィクションでない場合はせりふが

意味で裏打ちされている、このように考えられるかもしれない。しかし、私見によればこのモデルが倒錯しているのである。

特段の事情がない限り、我々の発話は、まず大抵は、言語行為である。オースティンが performatives の分析で infelicity として列挙したのが、この特段の事情である。例えば、発話にはバックグラウンド・能力が必要である。私は量子物理学については薄弱な知識しか持たないので、私が量子物理学について述べることは間違いか、他人の受け売が多い。不誠実や誤解があってはならず、劇や朗読、引用、発声練習、冗談、他人を欺く場合も除外される。他方、このような格段の事情がない限り、さしあたり発話は言語行為として推定されるわけである。コンピュータのジャーゴンを借用すれば、デフォルトとして言語行為を想定し、必要に応じて個々の事情を検討すればよい、ということになる。

12. 終わりに

「心的表現と時制」という表題とその連関を考えれば、この論考は荒削りなプログラムに他ならない。ただ、個々の論点には未熟な誤りがあったとしても、一つの「パラダイム」が提示できていることを望むものである。

最後に、「時制」という看板を掲げたからには、コメントしておきたい問題がある。英語を事例に考える人々がこだわる問題に、進行形の存在がある。どの動詞のどの用法に進行形が許され、どれに許されないか、が彼らの関心事であり、辞書編集者にとっても当然大きな関心である。日本語に進行形はないものの、他方「いる」という形式動詞があり、これが「動作継続」と「結果継続」の二様で用いられる。しかも動詞によってその何れで用いられるかは実に様々である。「覚える」について言えば、「覚えている」は「覚えた結果今でも覚えている」の意味で通常用いられるが、「今、記銘している」という意味で「覚えているところ」の意味で用いることも可能であろう。(ただし、英語の remember のように「思い出す」の意味を兼ね備えてはいない。また、英語でも remind, recollect のように多くの類語がある。)しかし、「理解している」を「理解しているところ」の意味で用いるのは不自然であり、他方、「計算する」については「計算した結果を保持している」という意味で「計算している」とはいえない。(言うとすれば「計算してある」であろう。)日本語の「スル」と「シテイル」、そして「アル」の関係がどのようなものであり、「心的動詞」の問題の射程にどのように関わってくるか、現在の私は十分な見通しを持っていない。問題として記しておくに留めざるをえない。

注

- 1) 例えば、ギリシャ語に意志表現があるとみなすべきか否かが、ヘブライズムとの関係で微妙な問題であることについて、数人から教示をうけた。
- 2) 『哲学探究』Blackwell版 p.33 n, p.59 n, 第I部182節、187節、692節、『断片』469節を参照。
- 3) 私の考えでは、「忘れる」とは「忘れている」ことであり、「理解する」とは「理解している」ことである。つまり「理解します」「(あなたのことはもう) 忘れます」が performative に用いられる場合を除けば、「忘れる」「理解する」は、完結を含意している。逆に言えば、「忘れつつある」「わかりつつある」という表現がどれほど自然か、という問題になる。宇和島方言をモデルとすれば、「わかりよる」「忘れよる」といえるかどうかの問題である。ここで、「わかりよる」「忘れよる」と叙述するのが適当な事態から「わかるとる」「忘れとる」と叙述するのが適当な事態へ転換する瞬間を特定しそこで何が生じたか、何が変わったかをみれば、「理解」と「忘却」が解明できる、という考えをウイトゲンシュタインは批判した。『探究』151節以下の議論はこのように理解できる。ところで、日本語の話し言葉では「知る」ではなく「知っている」が基本形であろう。知足のつくばいの「吾唯足知」は確かに「ワレタダタルヲシル」と読まれるが、これは語りの言葉、しかも文語故の話である。さらに、「知る」の類語の用法は言語に応じてニュアンスがある。ドイツ語には wissen, kennen のみならず kennenlernen という単語まで存在し、このことに光明を見いだす哲学者もいるかもしれない。また、アメリカ人の英語教師が『時事英語研究』に書いていたエピソードであるが、彼がしばしば「Do you know Tokugawa Ieyasu?」といった類の質問を受けるとき、家康など見たことも会ったこともないので、「No.」と答えたのだが、そうすると誤解を招くので、日本人向けに「Yes.」と答えることにしている、とのことである。
- 4) ここでストローソンの「P 述語」との関係が問題となるが、詳論は別の機会に譲りたい。
- 5) ウイトゲンシュタインは『心理学の哲学 I』907節で、“Ich glaube”の現在形を欠いた言語を構想している。即ち、“Ich glaube, er kommt.”の代わりに“Er dürfte kommen.”といえれば十分である。この言語に“Ich habe geglaubt.”が含まれていても勿論差し支えない。
- 6) しかしながら、

*I believed that there was no hole.

という発言の‘I believed’は、私の過去の内心の状態の記述ではないか、という疑問はかなり根強いようである。これに答えておきたい。

まず、「内心」「状態」という表現が吟味を要する概念であるが、ここでは談話の文脈で私の見解を述べてみたい。

‘I believed that there was no hole.’

これで話は終わることはまずない。ここでとぎれると、

‘And?’

と聞き返されるのが自然であろう。

‘I believed that there was no hole, but it was a grave mistake. To my surprise, I felt into the hole.’

などと、続くべきであろう。

‘I believed that there was no hole, and there was no hole.’

などとは言わないのである。

この意味で、‘believe’も世界関与的、あるいは世界と私(彼)の関係を含む、表現である。同様に

'I know that p, and p'

とは言わず、

'p, and I have known that fact for three years.'

などと、補足・対比・限定を要求するのが自然である。

さもなければ、

'Why don't you say just p?'

'Why do you repeat 'I know'?''

と、問い返されるであろう。そして冗談を付け加えれば、

'Because I am a philosopher of Cartesian trend.'

7) The Concept of Mind, Chapter 3 The Will

Mental Expressions and Their Tenses — A Wittgensteinian Explication —

Masahiro OKU

- 1 In this essay some problems in the philosophy of mind are discussed from the Wittgensteinian viewpoint, with reference to his ideas that the grammar of mental expressions are quite different from that of the non-mental ones, and that we should scrutinize the former piecemeal because of its formidable intricacy. The tense or temporality, including the aspect, of mental verbs will be given a special focus.
- 2 Firstly, six questions are raised. 1) I ask someone to teach a game to a child and he teaches him dice. I say 'I didn't mean *that*.' Can I say this even if I did not think of the exclusion of the gamble at the moment of asking? 2) I teach a child to add 2, and he continues 100, 104, 108, ... I say 'I meant that you should write 100, 102, 104, ..'. Can I say this unconditionally? 3) Yesterday I remembered his name, but today no more. Exactly when did I forget it? 4) Since yesterday I have known the word 'poundal.' Have I known it continuously since then? 5) Yesterday a child said 'I hope' for the first time. When did he hope for the first time? 6) He was once liberal, but he is now hard conservative. When did he become conservative?
- 3 Our opponent would answer thus: 1) only if the intension of exclusion was evidenced in my mind or somewhere else at the time of my asking; 2) similar to 1; 3) the future psychology will discover the exact moment of forgetting; 4) yes; 5) sometime before his first utterance of 'I hope'; 6) similar to 3.
- 4 In my opinion, our opponent understands mind on the model of body. He assumes that all the mental phenomena should be tangibly realized somewhere and that, in principle, their changes can be observed continuously.
- 5 I do not answer the question 'What is the mind?' straightforwardly, but as follows: 'mental expressions' are the expressions which are ascribable to a mental entity *qua* mental. Generally speaking, mental expressions and non-mental ones are not altogether separable from each other. Here I would like to concentrate on some specific mental verbs which are sometimes considered as referring to 'inner' states/events, namely, 'know,' 'believe,' 'will,' 'intend,' and 'mean.'
- 6 Main results of my analysis are :
 - a) Neither 'know' nor 'believe' describes an inner state/event in mind.
 - b) Expressions of this type function as sentential adverbs. Moreover, the grammatical type of those words does not entirely parallel the grammatical type of their Japanese

and some other tongues' counterparts.

- c) We need/should not always state our 'will' or 'intention.' Rather, we have to express it only under some circumstances; such as when our 'otherwise unsaid' will is frustrated.
 - d) 'Mean' is a device for paraphrase, excuse, etc.
 - e) We usually receive others' utterance at its face value. Only in limited cases, in the cases of infelicities in Austin's sense, do we need to make special remarks, and speak of 'meaning.'
- 7 Throughout this essay I have used Japanese, its modern standard form and its dialect, as the frame of reference against which to compare English and some other European languages.